
なめこ太郎 / 6 6 6 文字奇譚

閉伊卓司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なめこ太郎 / 666文字奇譚

【Nコード】

N1742K

【作者名】

閉伊卓司

【あらすじ】

ちようど666文字で綴られるお話には、摩訶不思議なパワーが秘められていると言われております。そんな奇妙なストーリーを、思いつくたびに更新してゆこうと思います。

らーめん屋

近所に、以前から美味しいと評判のらーめん屋があった。そんなにうまいなら一度食ってみようと思いたびたび訪れてみるのだが、いつ行っても長蛇の列ができている。生来、堪え性のない私は並んでまで食う気にもなれず、また次の機会にでもと引き返すうち、いつしかそこで食うことは諦めてしまった。

そんなある日のこと、寝る前にビールを飲みすぎたせいで夜中に尿意をもよおし、便所へ行っただけで眠れなくなってしまった。時刻は午前二時を少し回ったところ。どうにかしてもう一度眠ろうとするが、ますます目が冴えてしまいおまけに腹まで減ってきた。冷蔵庫を開けると案の定何もない。仕方がないので寝間着の上からジャンパーをはおり、散歩がてらぶらりと夜食を買いに出た。

途中、例のらーめん屋の前を通りかかると、こんな時間にもかかわらず営業していた。これは良いと思い暖簾をくぐると、客は私きりで他には誰もいない。厨房の中では無愛想なじいさんが一人、面白くもなさそうに鍋の中のスープをかき回している。「いらつしやい」もなければ、注文しても返事もよこさない。結局そのじいさんとは一言も口をきかないまま、私はらーめんを食い終えて店を出た。愛想は悪いが味はそこそこで、満腹したためか部屋へ戻るなり急に眠気が襲ってきた。

翌朝、目が覚めるとひどい悪心がして慌てて便所へ駆け込んだ。したたか吐くと、なんと胃液と一緒に大量の髪の毛が出てきて驚いた。

それ以来、深夜営業のらーめん屋へは行かないようにしている。ちなみにあんなに繁盛していたにもかかわらず、その店は半年も経たないうちに潰れてしまった。

仏壇の菓子

小さいころ、よく祖母の家へ泊まりにいくと夜仏間に一人で寝かされた。祖母は門徒で、仏間には阿弥陀如来を安置した壮麗な金仏壇がしつらえられていた。そこにはいつもたくさんの菓子や果物が供えられていて、部屋の中は甘い匂いに満たされていた。私が訪れるたびに祖母はその供物の中から幾つかを手に取り「ほら食べなさい」と言つてよこした。しかし線香の匂いの染み付いた菓子や果物を、私は口に入れるのを嫌がった。

あるとき、その仏間で寝ていると、ちやぐちやぐと何かを咀嚼するような物音がして目が覚めた。見ると仏壇の扉が目一杯に開かれていて、その前におかっぱ頭の女の子がちょこなんと座っている。藍地に絞りで白く染め抜いた浴衣を着て、一幅のしごき帯を腰にたらしている。彼女は仏壇に供えられた菓子や果物を両手に持つてむさぼるように食べていた。子供心にも、それが人外のものであることが分かった。私は声を立てないよう口を固く引き結んでいたが、しかし不思議と恐怖は覚えなかった。それどころか彼女に対し何かしら親しみのようなものさえ感じ、その豪快な食べっぷりに見とれているうち再び寝入ってしまった。

翌朝その話を祖母にすると、一枚の写真を見せてくれた。古い写真で飴色に変色していたが、髪型や浴衣の柄はまぎれもなく昨夜見たあの少女のものだった。「この子か？」と訊かれたので「そうだと答えると、これは祖母の姉だと教えてくれた。戦後の食糧難で栄養失調にかかり、幼い時分に死に別れたそうだ。

その話を聞いて以来、私は仏壇に供えられている菓子や果物をありがたくいただくようになった。

なめこ太郎

信州は伊那の蛇峠山に百太夫を祀った社あり。いつの頃よりかこのご神木の根元に一本のナメタケ生えたり。陰茎のごとくに隆々とした姿なり。麓の村の者これを見てきつと神靈宿りたる尊き物に違いなしと結界はりめぐらし、夫婦和合、子孫繁栄の神として慎重に祀りたれば、これをナメコ様という。あるとき在所の土豪の跡取り息子に嫁来たり。美しく氣立てよき娘なりしが夫衆道に熱上げたるなればいっかな肌合わそうとはせず、家の者これをたいそう憂えたり。子宝かなわざれば里へ返すべしと言いしところ娘たいそう悩みて、夜な夜なナメコ様に願掛けたり。満願叶つてようよう娘孕みたるに夫これを訝しんで責めたり。事の次第知りて、其は我の子にあらずと夫たいそう怒りついに娘を山へ逐いたり。村の者これを憐れみ山中の醜屋にて破れ菰かけ匿いしところ、いよいよ産み月となりて娘氣狂いになれり。そのまま山中へと隠れたるに山犬にでも喰われたるべしと諦めしところ、ある夜山の頂より元氣なる産声山々に飢せり。さては魔性の子産みしかと夜明けてより村の者打ち揃いて山中深く入りたれば、娘一人大岩の上にて倒れ臥しおり、見ればすでに血荒れにて事切れてありたり。かたわらに醜き嬰兒の亡骸あり。ぜひなしとてそこに打ち捨てたるに、夜な夜な赤子の声にて泣きたれば淋しきこと甚だしかるなり。村の者たいそう恐れてこれを持ち帰り、尹良大神の首塚のそばに埋めて丁重に祀りたり。やがてその傍らにありたる古木より見事なナメタケ生じ出でたり。人々これをナメコ太郎と呼びて、猿田彦神の眷属なるべしとて後々まで信仰せりという。

古い浴室

「大家さんの記憶が正しければ、あそこは昭和四十七年に建てられたそうです」

今年大学院生になる石川さんは、公園ベンチで鳩にエサをやりながら少し遠い目になって視線を上げた。

「なので浴室はもちろんユニットバスなんかじゃなく、古いタイル貼りの造り風呂だったんですけど……」

彼が三年前まで暮らしていたアパートは、トイレと風呂が各部屋に備え付けられ、それで家賃が四万円以下という貧乏学生にとっては大変ありがたい物件だった。

「最近、銭湯代だってバカにならないですからね」

ところが、彼がそのアパートへ越してみると、浴室で色々不思議なことが起こった。

「夜中にね、水を使う音がするんですよ、誰もいないのに。それとタイルの上をぺたぺた歩き回る気配があったり……」

なかでも気味悪かったのが髪を洗うときで、あきらかに背後からじつと見られている感じがしたそうである。

「だからいつも髪は、ぱっぱと適当に洗って済ませていました。目をつぶるのが恐かったんです」

しかしそんなある日、シャンプーが目に入ってしまった、慌ててお湯を出そうと蛇口を探っていたら――。

「突然、背後からぬつと腕がのびてきて、僕のかわりに蛇口を捻ってくれたんです。次の瞬間お湯がさーっと出て、思わず悲鳴をあげましたね。だってそのとき氷のように冷たい肌が僕の背に触れたんですもの」

彼は、ぶるつと身震いして腕をさすった。晴天の七月だというのに肌がぷつぷつと粟立っている。

「……裸の、乳房でしたね、ちょっとたるんだ感じの。ぺたつと僕の背中に当たって」

どうやら、そこに棲みついていたのは女性だったらしい。

ゾンビちゃん

焼けこげた大地のまん中で女の子ゾンビが一人、ぼけらんと空を見上げていました。

風がそよぐたび、栗色のショートヘアがはらはらと抜け落ちます。空なんか見上げて一体何を考えているのでしょうか？

彼女の脳はもうすっかり腐って、ひからびて、虫食いの穴まであいているというのに……。

もうー

遠くのほうでママの呼ぶ声がしました。

どうやらお昼のようです。

あうー

元気良く返事をして、ずりりりり、ゾンビちゃんはねじ曲がった足を引きずり歩きはじめます。

お家へ帰るとパパもいて、テーブルにはご馳走が並んでいました。

人間の生肉です。

まだ、ほかほか湯気が立っています。

パパは毎日、防衛省のシェルターまで出掛けていつては中に立てこもる人間を引きずり出し、こうして持ち帰ってくるのです。

がうー

いただきますを言つて、三人仲良くご馳走にかぶりつきます。

あまりの美味しさに胃の中のウジ虫もびっくりしているようです。

——と、そのとき何処からか、ひーんと空気を切り裂く音がして、ゾンビちゃんは食事の手を止め、ガラスのないひしゃげた窓から空を見上げました。

あ。

青い空、白いうろこ雲の合間から、黒い点が一つ、ぐんぐん近づいてきます。

うぎぎぎ

…… やつと来たわ。

ゾンビちゃんは立ち上がって小躍りしました。

それは彼女がずっと待ちこがれていた空からのお迎えだったのです。見る見るうちに迫りくるその黒い物体は、やがて大地に突き刺さり、ぴかっと眩い閃光を放つてもの凄い爆風で何もかもを吹き飛ばしてしまいました。

ゾンビちゃんのお家も木っ端みじんです。

あはは——。

彼女は、笑いながら土へと還りました。

かむろ小路

かむろ小路は、堀田左京一万六千石の上屋敷のそばにあった。

九段坂から騎射馬場を下ったところ、後に斎藤弥九郎が練兵館をおこすあたりである。

ちなみに「かむろ」とは「禿」と書くが、見習い遊女のことではない。

——河童である。

かつてその辺りは、河童が出没して人を堀へ引き込む寂しい場所であった。

寛永の終わりの話。

香坂某という御先手組の若いさむらいが共も連れずにこの小路を歩んでいると、脇に女が一人うずくまっていた。夕刻の薄暗かりに見ると頭から水をかぶったようにびしょ濡れである。

「これ、いかがした？」

問うと、女はこわごわ顔をあげ震える声で言った。

「親類の家へ行った帰りにここを通りましたところ、いきなり河童があらわれて御堀へ引き込まれました。なんとか命からがら水から上がったのですが、どうにも腰が立たなくなってしまうて……」

どうやら武家の女房らしく、歯が黒く染められていた。

「それは難儀しているであろう、どれ、それがし御当家まで背負って進ぜよう」

女は辞退したが、香坂がなおも言うつと恐縮した面持ちでうなずいた。しからばと香坂、しゃがみ込んで女に背を向ける。

そのとき。

刀の柄が女の頭にこつんとぶつかった。瞬間、彼ははつとなつた。結った黒髪に当たったにもかかわらず、かんと陶器を打つような固い音がしたからである。

——さては、こやつが河童か。

まだ戦国の気風さめやらぬ時代である。

飛び退りざま抜刀すると、裂ぱくの気合いもろともえいっと横に薙いだ。

河童の首は、ぽーんと飛んで板塀にどすんと当たった。

その首は今も、善國寺の蔵の中へ安置されているという。

写真

他県へ嫁いだ友人が、だんなの休みなどを利用して実家へ戻ってくると、決まって地元で一人暮らしをする私のアパートへ羽をのばしに来る。今日も夕方から美幸が転がり込んできて、そのまま夜中まで酒盛りとなった。

こういうとき話を盛り上げてくれるのが、フォトアルバムである。彼女と二人缶ビールを何本も空け、古い写真を引っ張り出しては、それを見てきやあきやあ騒いでいた。

「あー、この写真覚えてる。みんなで千葉にある心霊スポットへ行ったときのやつだね」

「そうそう、香奈恵が免許とつたんで、そんじゃあどっか行こうかって話になって……」

「まじ怖かったよねー、あんとき」

私たちがまだ学生のころ、雑誌で見つけた心霊スポットへ行ってみようという話になり、友人の運転する車に分乗して掲載されている場所を片っ端から訪れたことがある。そのとき後の証拠としてメンバー全員で記念撮影したのが、その写真だ。

「今思えば、かなりバカなことしてたよね」

「ほんとだね、うふふ……」

楽しそうな彼女の顔から、ふっと笑みが消えた。

「あれ……でもこの写真って、なんか変」

「え、なになに、お化けでも写ってる？」

「そうじゃないけど……ほら、メンバーが」

彼女から写真を取り上げ、その中に写っている顔ぶれを一人一人確認してみた。

「静香でしょ、里穂でしょ、久美に、香奈恵に、あんと、私——」
どの写真にも、ちゃんと同じメンツがそろっている。

「なによ全員いるじゃない」

「バカね、だからおかしいのよ」

「え？」

どこか遠くを見つめるような目で、彼女がつぶやいた。

「……この写真って、一体誰が撮ったんだろう？」

顔

港を一望する岬の突端に弁財天を祀ったお社があった。漁の安全を祈願して明治の終わり頃に建立されたものだ。その祠堂の脇には御手洗池という人造の池があつて、夜中にその水を覗くと老人の顔が映ると言われていた……。

夏休み最後の夜、僕とユウジたち五人はそこで肝試しをやることになった。

刻一刻と深まる闇の中、僕たちは懐中電灯の明かりを頼りに古びた鳥居をくぐった。

御手洗池は子供が入っても膝まで浸かるくらいの浅い池だ。しかし闇に沈むその水面はまるで底なし沼のように黒く淀んで見えた。まずガキ大将のユウジが覗いた。みな緊張して息を飲んだ。しかし程なくして彼は、けけけと笑った。

「なんのことはねえ、俺の顔が映っているだけだ」

続いてケンタとヒロキも覗いた。

「ほんとだ、自分の顔しか見えねえ」

いよいよ僕たちの番となった。千秋とふたり、ぎゅっと手を繋ぎ合い夏草のすきまへ首をさし入れる。すると暗く張りつめた水のなかから、目をむいた老爺と老婆がじつとこちらを見ていた。

僕は悲鳴をあげ、千秋の手を引いて一目散に石段を駆け下った。

翌日、ケンタが車にはねられて死んだ。その十日後にはユウジとヒロキが海で溺れて死んだ。僕と千秋は生きた心地がしなかった。これはあの池を覗いた祟りに違いない。きつと次は自分たちの番なのだ。

とうとう恐怖に耐えきれず、僕たちはありのままを校長先生に話した。すると彼女は夜中に外出したことを叱った後で、こんな話を

してくれた。

「昔からあの池に映ると言われているのは、死ぬ直前の自分の顔なのよ」

そして優しく笑った。

「あなたたちは長生きするようね」

暗流

友人の葬儀は、彼の実家がある山間の小さな村で行われた。

そこは険しい山道をバス二本乗り継いで行かねばならぬ、辺鄙な土地にあった。長らく文明社会から隔絶されたようなその村には未だに古い風習が残されていると生前彼がよく話していた。そのときは半信半疑で聞いていたが、いざ当人の葬儀に立ち会う段になって、彼の言ったことはすべて本当であると思い知らされた……。

通夜を終え、弔客に振る舞われる酒食もおおかた片付いた夜半、突然遺族たちの手によって棺が外へと担ぎ出された。そろそろ床を借りて休もうかと思っていた私は一体何事だろうと驚いていたが、弔客がみなそれに従うので、仕方なく自分も列に加わった。

濃い霧の立ちこめるなか、葬列はゆるゆると進んでいった。どうやら村の北東にある、三角山と呼ばれるピラミッド型をした小山を目ざしているらしかった。螺旋状に延びる急峻な坂道をのぼり山頂までたどり着いた頃には、私は汗びっしょりで肩で息をしていた。

頂上には鎮守を祀る社があった。こうこうと篝火が焚かれ、地面を這う人々の影が森にそびえる木々と黒く折り重なって見えた。

ふと見ると、社殿のわきに大きな古井戸がある。私は嫌な予感にかられたが、はたして祝詞とすすり泣きが入り交じるなか遺骸の入った棺は、やおら遺族たちの手によってその井戸のなかへと投げ入れられた。あつと驚いて一呼吸おいてから、ざんぶ、と水のはじける音がした。

後になって聞いた話だが、その井戸の地下水脈は、村の遙か下に造られたダムへと通じているらしい。その水は、飲料水として広く下流域の世帯へと配られている。

オシラサマ

東北地方を旅したときの話。

いきがって行く先も決めずに一人旅としゃれ込んだあげくバスに乗りそこね、宿にもあぶれてしまった。宮城県北部にある山あいの町だ。さびれた目抜き通りを徘徊すること一時間、ようやく民宿とおぼしき平屋建てを見つけた。土台が腐っているらしく家は少し右にかしいでいた。そのせいか私が玄関に身を入れるなり、がらりと引き戸が勝手に閉じた。

「……あの、一晩泊まりたいんですが」

薄暗い廊下へむかつて声をかけると、しばらくしてひどく腰の曲がった老婆が現れた。

「もう宿はやってねえでがんす」

どうやらすでに廃業しているらしい。

「いや、そこをなんとか。寝るところを貸していただくだけで結構ですから」

ここで断られては大変なので何度も頭を下げると、さすがに気の毒に思ったのか老婆は、使われなくなつた離れの座敷へと案内してくれた。そこは家具もない八畳間の和室だった。

「宿でねえから、飯も風呂も用意できねけんども……」

「いえ、夜露をしのげるだけでありがたいです」

「それがらその奥の部屋ね、オシラサマの間だで、戸ひらいだらいいけんよ」

その部屋には、さらにつづきの間があつたのだ。

——深夜。

その奥の間から、にちゃりと妙な音がした。ところてんを握りつぶすような音だ。気味悪かったが好奇心も手伝い、私は部屋の明か

りをつけ奥の間の戸をそつと開いた。

天井から、馬の生首がぶら下がっていた。その切断部から凝固し
かかった血が床へ垂れる音が聞えていたのだ。

にちやり

私は、そのまま気を失った。

翌朝、ゆうべの出来ごとを話そつと老婆を探したが、その家は無
人だった……。

独り言

「あなた近ごろ独り言が多いわね」

妻にそう言われた。

身に覚えのないことだったので少し驚いた。

「車を運転してるときなんか、特にすごいのよ」

「ほう、俺は一体どんなことを喋ってるんだい？」

「さあ？ 終始ぶつぶつとつぶやいてるだけだもの……」

面白い。

無意識のうちに口走る言葉とは、一体いかなるものか。

俺はボイスレコーダーをグローブボックスへ放り込むと、日が暮れるまで車を走らせてみた。そして帰宅後、はやる気持ちを抑えてまず風呂に入り、そして缶ビール片手に書斎へこもった。

レコーダーの再生ボタンを押す。

まず自動車の走行音、そしてウィンカーの明滅する音……、しばらくして第一声が飛び出した。

（ひき殺すぞ、ばばあ）

我ながらなんて乱暴な。思わず苦笑がもれたが、その声をかわきりにレコーダーのなかの俺は堰を切ったように喋り始めた。

（早く渡れよくそガキどもが、ちんたら歩いてつとはねちまうぞ。

やい、そのじじい、死に損ない、いつそのまま引導渡してやるうか）

ビールを飲みながらにやついていた俺も、そのうちにだんだんうすら寒くなってきた。この声のぬしは本当に俺なのか？

（どいつもこいつもバカにしゃがって。見てろよ、今に全員ぶつ殺してやるからな。道具はそろってるんだ、ナタに包丁に皮手袋、顔を隠すための目出し帽……）

いやな予感がして、とっさに文机の引き出しをあけてみた。はた

してそこには今聞いた殺人の道具がすべて揃っていた。これは一体……。

（おっと、返り血を避けるためのレインコートを買ってなかったな）
そして俺は言った。

（おい聞してるか、忘れずに買っておけよ）

いあーう

生後五ヶ月になる息子が、ようやく言葉らしきものを口にしはじめた。

「あー」とか「うー」しか言わなかったのが、「ぶうぶう」や「まんまん」、ときには「うつけーい」などと叫んで私や主人を驚かせる。

じつはこれらは喃語といって、まだなんの意味もなさない赤ちゃん言葉である。でも新米ママの私にはそれが嬉しくて、主人と二人それらの意味するところを推理し合っては幸せをかみしめていた。

そんな言葉のなかに「いあーう」というのがあった。一体なんの意味なのか、色々と頭をひねってみたが、ついぞ思いつかない。やがて息子は成長し、大きくなるにつれその「いあーう」も、だんだんと聞き取れるようになってきた。

いあーう。

ひああむ。

ひあまちゅ。

ヒサマツ……。どうやら、それが正しい発音らしい。

「ねえ、ヒサマツってなあに？」

あるとき、三歳になった息子にそう訊ねてみた。すると彼は、あらぬ方を指さして言った。

「あのしと」

私は、いっぺんで怖くなった。ヒサマツとは人の名前だったのか。主人に話したが、夢見がちな子供の言うことだから気にするなと言われた。

小学校へ上がり、近ごろではめっきり大人びてきた息子は、もう

自分からはヒサマツという言葉をお口にしなくなった。でも私が「今日はヒサマツさん、なにしてる？」と訊くと、だれもない座敷へ視線をおよがせて「あそこで、うたた寝してる」などと返してくる。

ヒサマツなる人物が一体何者で、どうして私たちの暮らすこの家に棲みついているのか、私は知らない。ただ今度生まれてくる第二子には、決してその言葉を口にして欲しくないと願うのみであった……。

指

食欲の秋だというのに、連日の残暑にくわえて仕事によるストレスがたたり、すっかり食が細ってしまった。これから年末にかけ繁忙期になるというのに、まったく体に力がわいてこない。このままではいけないと思い、料理本などを読んで色々と献立を工夫してみるのだが上手くいかず、食は細るばかりだった。

そんな折り、なにげなく通販サイトを眺めていて見つけたのが、これ――。

食欲がわく魔法のくすり

思わず飲みかけの紅茶を吹き出してしまった。なんて安直な商品名だ。でも百グラムたったの三百六十円だし、まあ笑い話の種にでもなればと思い注文してみた。届いたのは袋詰め of 白い粉。それはなんの変哲もないグルタミン酸の化学調味料に見えた。やはりダメされたのか。ほんのわずかでも期待していただけに少しがっかりした。それでも捨てるのは勿体ないと思いビンに移し替えようとしたところ、あやまって左手の人差し指にかけてしまった。

その瞬間ぞくつと鳥肌が立った。なぜだか自分の指がたまらなく美味しそうに見えるのだ。みるみる口中に唾がわき、胃が久かたぶりで元気に活動し始めるのが分かった。

ばかな、自分の指だぞ。

でも食べたい。

理性では、もう抑えきれないほどに食欲がわいていた。

この指が食べたい。

口の端からつつつとよだれが糸を引き、気がつくと自分の指をまな板の上に乗せていた……。

それから半月がすぎた。

今では左手に指は一本も残っていない。両足の指もすでに十本とも食べ尽くし、残るは右手の指だけとなっていた。

ここで、ふと悩む。

さてこの状態で、右手の指をどうやって切り落とせばよいものか……と。

父の客

久しぶりに田舎で暮らす両親のもとを訪れると、母がえらく疲れ
た顔をしていた。

具合でも悪いのかと訊くと、そうではないらしい。

「近ごろ夜中になると、父ちゃんを訪ねて大勢のお客が来るけん、
気になってよう寝れんのよ」

「非常識な客じゃのう、一体どこの誰な？」

「それが父ちゃんに訊いても、さっぱり要領を得んもんじゃけえ、
往生しとるんよ」

「けど、そがい大勢で来るんじやったら、顔くらい合わすじやろ
？」

「不思議なことに、一度も、誰とも顔合わせたことないんよ。なん
でじやろうね？」

そう言つて母は首を捻つた。おかしな話もあるものだ。当然父に
も問い質してみたが、「古い友だちじゃ」の一点張りでそれ以上な
にも語ろうとはしない。私はその日のうちに帰るつもりでいたのを、
急遽一晩泊まつてゆくことに決めた。

夜中の二時過ぎ……。

階下を、大勢の人が歩いてゆく気配がして目が覚めた。

——来たか。

そつと部屋を抜け出す。客はどうやら一階にある父の書斎に集ま
っているらしい。足音を忍ばせその部屋へ近づくと、私はそつとド
アに耳を押し当てた。とたんに、それまでざわついていた人の気配
が霧散し、代わりに父の不機嫌そうな声が聞えた。

「そこで何しちよるんなら？」

「……お客さんに挨拶しようか思つて」

「アホ、お前が来たけん、みな帰ってしもったわ」

見ると、書斎のなかには父一人がぼつねんと佇んでいた……。

それから三年後の秋に、父は亡くなった。田舎ということもあって、葬儀には近隣から多くの弔客が訪れた。ただ母が言うには、そのなかに明らかに見たこともない人が、かなりの数まじっていたらしい。

雨のなかのチロ

公園へむかう坂のとちゅうに、その家がありました。

白いかべと、赤いやね。

きよ年までわたしたち家族が暮らしていた家です。

そこには大きな庭があつて、花だんのわきに手作りのお墓が立っています。

わたしが飼っていたスピッツのお墓です。

名前はチロといって、まっ白い毛なみがふわふわの小さくてかわいい犬でした。

わたしは今日もこつそり、そのお墓のようすを見にきたのです。

庭では知らない男の子が遊んでいて、植え込みのかけからのぞくわたしに気づくと大声でさけびました。

ママ、へんな子がいるよ！

わたしは、あわてて逃げました。

どれだけ走ったでしょう、いつのまにか降りだした雨に気づいて立ち止まると、後ろから犬のなき声がしました。

わん、わんっ

ふりかえると、なにか黒いものがこつちへむかつて駆けてきます。

どう見てもドロのかたまりでした。

でも、わたしには分かります。

それはチロのかたちをしていたのです。

チロ！

わたしは、うれしくて泣きそうになりました。

だってチロが生き返ったんですもの。

チロ、チロ、わたしに会いにきてくれたのね！

わん、わんっ

でもなんだか動きがへんでした。

チロはよろよろとよろけて、いまにも倒れそうなのです。

そうです、降りしきる雨にド口でできたからだか溶けはじめているのです。

たいへんだあ！

わたしはあわててチロのもとへ駆けよると、服がよごれるのもかまわず抱きしめました。

チロッ、チロッ！

でも雨にうたれたチロのからだは、わたしの腕のなかでぼろぼろとくずれ、あとには小さな骨がいくつも、いくつも、まるで花火のもえかすみたいに散らばっているばかりでした……。

黒の老爺

医者から癌の告知をうけた。

余命三ヶ月だそうだ。

すぐに入院しなさいと言われたが、どうせ死ぬのなら動けるあいだは生まれ育った家で暮らしたいと主張して、しばらくは自宅から通院させてもらうことになった。

その頃からだろうか、視界のすみっこに妙な人影が映るようになったのは。やせこけて背の低い老爺だ。黒っぽい紺のきものを着て、なぜだか終始にこにこと嬉しそうにしている。ははあ、こいつが俗に言う死神というやつだな。ちよつと嫌な気分になったが、それでも一度死を覚悟してしまつたせいか不思議と恐怖は覚えなかった。

はじめのうち視野の端をずっと横切る程度だったのが、やがて老爺は堂々と私の前へも姿を現すようになった。もちろん話かけても返事はない。ただなにが嬉しいのか、いつもにこにこしながらこつちを見ている。ときおり鬱陶しくもなるが、別段なにか悪さするわけでもないので放っておいた。

やがて容態がどんどん悪くなり、こりゃいよいよかなと覚悟を決めたとき、医者が出す薬が体に合わなかったのか、老爺のいる前でぶうつと粗相してしまつた。途端にそれまで好々爺然としていた顔が、まるで酸っぱいものでも飲み込んだような情けないものになった。その表情があまりにも可笑しかったので、それ以降、私はその老爺を見かけるたびに尻を向けて、ぶうつとやらかすようになった。ある日とうとう腹を立てたらしく、老爺はぶいっと部屋を出たきり戻らなかった……。

その日を境に、私の体調はみるみる回復していった。

やがて抗癌剤投与も放射線治療も受けないまま、その年の暮れにはとうとう快癒してしまった。

ふるさと

悪いことは重なるもので、恋人と別れたその一週間後に、今度は勤めていた会社が潰れた。公私ともに虚しくなった私は、ある朝小さなボストンバッグひとつさげて甲府行き特急かいじー〇九号に乗りこんだ。自分が生まれ育った山梨の実家へ帰るためだ。

季節はもう秋めいて、駅へ降り立つと肌寒さで身がちぢんだ。それでも空はよく晴れわたり、遠く見はるかす山々の稜線がくつきりと青く波うつていた。

家には老いた両親が暮らしている。「ただいま」と言つて玄関をくぐると、母は修学旅行から帰った娘でも迎えるように「おかえり」と微笑んだ。父は縁側で盆栽にハサミを入れていた。「お父さん、わたし帰ってきた」と言うと、こちらに背を向けたまま「そうかとつぶやいた。

それから数日、私は父の庭いじりを手伝ったり飼い犬を散歩させたりして過ごした。夜になれば懐かしい母の手料理が待っている。久しぶりにのどかで平穏なときを過ごし、満ち足りた気分だった。

ところが六日目の朝、母がぼつりと言った。

「そろそろ帰りなさい」

しかめっ面で朝刊をひろげていた父も無言でうなずいた。私はなんだか腹立たしくなり、当てつけのようにボストンバッグへ荷物を詰めはじめた。外では木枯らしが吹いている。またあのなかへ戻るのかと思うとうんざりしたが、「元気でやるんだよ」という母の声に送られて家を出た……。

気がつくとも枯葉のうえに横たわっていた。ゆっくりと身を起こす。足もとにボストンバッグと、そして空になった薬瓶が転がっている。私は立ち上がってコートに付いた土を払った。

そして両親の墓に向かい、そつと手を合わせた。

そば米汁

昔々、まだ都では藤氏が栄華の夢を極めていた頃……。

阿波の國は祖谷川のほとりに、三弥というたいへんな分限者がありました。祖谷川は、四国三郎へそそぐ水量ゆたかな川でしたが、かずら橋など架かるずっと以前のことでしたので、ひとたび甚雨に見舞われると旅人はそれは難渋したそうです。足止めをくらった旅人は困り果て、三弥の家に一夜の宿を乞いました。

ところがこの三弥という男、見かけは善人ですが根性は天逆毎のごとくねじ曲がっております。彼は旅人が来ると決まって「そば米汁をいっぱい馳走しよう」と言いました。旅人が喜んで膳につくと、最初は椀に一杯、それを食うともう一杯、さらに一杯と食べ終える後から椀に盛り、たまりかねた旅人が「もう結構」と言うとお前がいっぱい食うと申したから私は大鍋いっぱいに煮たのだ」と言つて、むりやり口をこじ開け汁を流し込んだそうです。

あるとき、この三弥のところへ若い沙門がやって来て喜捨を乞いました。三弥は例のごとくその僧を家に上げ「そば米汁をいっぱい馳走しよう」と言います。僧は「ありがたし」と喜んで、出された椀をぺろりと平らげ、次の椀もぺろり、その次の椀もぺろりと次々平らげてゆきました。気がつくと大鍋は空っぽです。怒った三弥は村じゅうの蕎麦を買い集め、幾つもの大鍋でそれを煮ると休む間も与えず僧に供しました。ところが僧は出される先からたちまち食べ尽くし、ついにはすべての大鍋を空にして三弥を驚倒させたそうです。

この僧こそは名を如空といい、後の弘法大師でありました。そして三弥の家は、間もなく没落してしまつたそうです。

江田さん

その炭坑は――深い海の底にあった。

坑道は、瀬戸内海の沖合い約三キロにわたって地下二百メートルの深さまで掘り進めていた。

二十四のとき、私は福岡の農村を離れそこで働き始めた。

ある日、いつものように六坑のせまい入口からトロツコに揺られて作業場へ向かう途中、突然事故に巻き込まれた。もの凄い爆発音がして地面に投げ出され、激しい落盤と土煙の立ちこめるなか私は意識を失った……。

「おい」

低い男の呼びかけに目を覚ますと、辺りは真の闇だった。

「生きてるか？」

「だ、大丈夫です……うつ」

両足に痛みが走る。落石に挟まれたのだろう、まったく身動きが取れない。

「足を挟まれたみたいです」

「俺もだよ」

その声には聞き覚えがあった。

「――江田さん、ですか？」

「ああ」

仲間の坑夫だった。

「今に助けが来る」

彼は落ち着いた声で言った。しかし送電が遮断され一切の光を失った闇の中、轟々と渦巻く周防灘の潮の音が私の恐怖心を駆り立てる。もし岩盤の裂け目から海水が浸入してきたら……。

「心配するな、俺なんか事故に遭うのはもうこれで四度目だ」

そう言っただけ彼は笑った。少しだけ平静を取り戻した私は、ぼつぽつと身の上話などを語り始めた。彼はそれを辛抱強く聞いてくれた。やがて数時間が経過したころ、ようやく仲間が救助に現れた。

「今、岩盤を除けてやるぞ」

「近くに江田さんもいるんです」

「分かった」

重機が、私にのしかかっていた大岩を徐々に持ち上げる。途端にそこにいた全員があつと叫んだ。

「岩の下に誰がいるぞ」

「ひでえ、ぐちゃぐちゃだ」

血にまみれた作業服に「江田」と縫い付けてあるのが見えた。

アパートの改修工事

長年住宅の改修工事などを手がけていると、いわゆるいわく付き物件に出くわすことがある。

——そのアパートの場合は、焼身自殺だった。

「ほら、その辺り」

不動産屋のおやじが、私の足下を指して言った。

「ちょうどその辺りに焼死体が転がっていたんだ」

思わずその場から飛び退いた。

床といわず壁といわず、全ての面がコンクリートむき出しの状態
で黒く煤けている。おまけに不快な臭いが充ちていた。ここで独り
暮らししていた女性が失恋の果てに焼身自殺したのだという。あま
り気持ちの良い話ではないが、しかしこのご時世、仕事を選んでい
る余裕などない。

「それでもやるかね？」

そう訊かれ、私は二つ返事で工事を引き受けた。

ところが実際着工してみると、なかなか思うように進まなかった。
大工がまったく残業したがないのだ。

「あの部屋はどうも気持ちが悪い、いつも髪の毛の焼ける臭いがするし
女のうめき声も聞いた。なにかあるんじゃないのか？」

このぶんでは予定した工期に間に合わないと思い、私はよく地鎮
祭に来る神主をお願いしてお祓いしてもらうことにした。

彼はまず人型に切り抜いた紙を北東のすみへ置くと祝詞を上げた。
するとその紙からぶすぶす黒煙が上がった。

「うつ」

髪の毛の焼けるひどい臭いがした。

祝詞が終わると、神主はそれを塩と混ぜて水道へ流した。

「祓除はこれで終わりだが、どうやらここは鬼の通り路らしい。工事はもう止めなさい」

その後会社でさんざもめたが、結局その工事は取りやめとなった。聞いた話だと、うちの後を受けて入った業者がそこで死亡事故を起こし、今は手つかずのまま放置されているという。

守屋の矢

伊那平の藤澤村に安彦という獵師がいた。あるとき彼が山へ入ると、みしみしと木をなぎ倒す音が聞こえてくる。不審に思つて音の正体を探ると、それは大木を横たえたような大蛇だった。見ると、峰辺に祀つた御左口様の祠へと向かつている。不敬なやつ。安彦は山刀を振りかざし、その大蛇の首を刎ねてしまった。

歸つてその話を皆にすると、村の年寄りどもが騒ぎはじめた。

「きつとその蛇はみしゃぐじ神の使わしめに違いない。なんて罰当たりなことを……」

村人たちは大蛇の亡骸を懇ろに弔つた。

ところが翌日から、池の水をひっくり返したような土砂降りが続いた。きつとこれは御左口様の祟りに違いない。皆は口々に噂し合つた。ついには天竜川があふれそうになり、村人たちは仕方なく龍神に生け贄を捧げることにした。選ばれたのは、今年八つになる安彦の娘だ。村の者はこぞつて彼の家へ押し掛けると、泣いて懇願する安彦と妻を取り押さえ、幼い娘を連れ出した。そして荒れ狂う天竜川へ沈めてしまったのだ。

翌朝、空は嘘のように晴れ渡り、安彦と妻はいつの間にか姿を消していた。

その翌年から、村で生まれた子どもが八つになると、山から鬼が下りて来てさらつてゆくようになった。あの鬼はきつと安彦に違いない。退治しようと村の者が何人も山へ入つたが、ついに戻つた者はいなかった。

困つた村人たちは、諏訪大神の力にすがることにした。やがて大社から神人が使わされ、通力のこもつた矢でみごと鬼を射殺した。

そのときの矢を埋めた場所が現在の守屋神社である。

今でも雨の日が続くと、地元の年寄りはそのへんお参りに行くそう
だ……。

寛永の悪魔憑き

二代將軍のころ長崎奉行をつとめた竹中采女正は、かの軍師竹中半兵衛の遠縁にあたる人で、質実剛健あつぱれ武士の鑑と世間からもてはやされていた。

ところがある時期より顔の色つやが失せ、頬がこけ、射るようだった眼光もどろりと濁りはじめた。心配して家臣が訊ねると、

「毎夜、夢枕に牛頭の鬼が立って我をさいなむのじゃ」

と打ち明けた。

一大事ということで僧侶を呼びよせ色々祈祷してみたが、鬼はいっこうに去らない。この話を聞いたある商家が、

「それは、ベーるぜーぶるという西洋の鬼だから伴天連でなければ抜えない」

と言った。

折しも世は鎖国禁教の時代、ことに長崎奉行はキリシタン弾圧の元締めであるから、とてもじゃないが伴天連の世話になどなれない。そうこうするうちに采女正の様子が尋常ではなくなり、夜中に目を剥いて汚物を吐き散らしたり、異国の言葉で喚き立てるようになった。

その頃を境に、彼のキリシタンに対する仕置きは苛烈さを増していった。糞尿の入った穴の上に何日も逆さ吊りにしたり、また煮えたぎった湯を少しずつ頭からかけたりした。悪事に手を染めるようにもなった。職権を利用して密貿易に加担したり、公金を横領したり、町人の娘を手籠めにしたりと悪行の限りを尽くした。

やがてこの事は御上の知るところとなり、寛永十年ついに切腹を言い渡された。

腹を切るとき彼は介錯を断り、腹腔から引きずり出した腸を検視の役人へ向かつて投げつけ笑った。そして自身の手で切り落とした

首が宙を舞い、

「いずれ雲仙にて……」

と言つて飛び去つたという。

島原の乱がおこつたのは、その三年後のことである。

怪物ちゃん

流しの屋台も人力車という時代ではないらしい。

その飲み屋もダイハツのワンボックスを改造したものだった。やっっているのはゴマ塩頭のヒラメみたいな顔をしたオヤジ。よく陽に焼けて、年はそろそろ還暦といったところか。いつもワンサイズ大きめのだぼシャツを着て、派手なスカーフを首に巻いている。安いわりには酒も食い物も上等で、もっか単身赴任中の私は、そこで酒を飲むことを楽しみにしていた。

その日も、オヤジの下世話なゴシップを着にして一人で飲んでいった。

「この向こうにちよつとした歓楽街があるの知ってるかい？」

「環七を越えたあたりでしょ」

「そうそう。その雑居ビルの地下に、ララって名前のオカマ・バーがあるんだけど」

オヤジの話はいつも面白くて、つい酒がすすむ。

「昔、その店に三十過ぎてからオカマになった変わり者がいてさ、これが店ではいつも一番人気で」

「へえ」

「でも本人は知らなかったのさ……」

「なにを？」

「客のあいだで秘かに怪物ちゃんと呼ばれていたことを」

どんな器量だかうかがい知れる話だ。

「それを知ってショックだったのか、ある日アパートで首吊っちゃってね」

「……嫌な話だなあ」

酒が不味くなってしまう。

その時ふと、なぜだかオヤジの首に巻いてあるスカーフが気になった。

「そのひとは……亡くなったんだよね」

「どうして？」

「いや、なんとなく」

バカな妄想だ。酔いが足りないせいか……。

「焼酎もう一杯」

「へい」

しかしオヤジが足下にある一升瓶を取ろうと身をかがめた瞬間、私は見てしまった。

だばシャツの襟からのぞく……胸の谷間を。

以来、怖くてその屋台へは行っていない。

男湯

今どき男尊女卑でもないだろうが、会社の慰安旅行で訪れたその旅館は、男湯にくらべて女湯がえらく貧相だった。

「なんかム力つくわね、こういうの」

部屋にあった施設案内のしおりを見てユミが頬を膨らませる。

「男湯はこんなに豪華な岩風呂なのに、あたしらはなによ、今どき五右衛門風呂ってか？」

面白みのない円形の浴槽は、四人も入れば身動きが取れないほどに狭かった。

「どうせ男どもは宴会でつぶれちゃうんだし、夜中にこっそり入ってやるうか、男湯に」

「やめときなよ、他のお客さんだっているし」

「大丈夫よ、うちの他はお年寄りのグループばっかだもん」

けっきょく私とユミは宴会を終えた深夜、こっそり男湯へ忍び込んだ。

「やった、誰もいないね」

浴室はがらんとしていた。私たちは手早く体を流し、岩風呂にどっぷりと肩まで浸かった。

「ふう、極楽極楽——」

湯気がかすんだ室内に、ちよろちよるとお湯の湧き出る音だけが反響している。

「風流だわあ」

「……あれ？」

お湯のせせらぎに混じって人の声がするような気がした。それは確かにこう聞えた。

オンナダ、オンナダ、オンナダ、オンナダ……

——女がいるぞ

「ちょっとなにこれ？」

そう思った瞬間、私たちは湯船の底に体を引きずり込まれた。

「ひっ」

ごぼごぼ……

そのまま意識を失い、翌朝洗い場で倒れているところを清掃員に発見された。

驚いたことに、旅行から帰ってみると二人とも妊娠していた。

もちろん私は堕ろしたが、カトリック信徒だったユミは会社を辞めてその子を産んだ。

死産だった。

医者に亡骸を見たいと頼んだが、ついに見せてもらえなかったという……。

道通さま

医者坊主なんてえのは、多少とんちが働かないと出来ない稼業でして。

そう、あれは大火事のあった翌年のこと。

行人坂の大黒さまから出た火が、お東さんの御堂にまで燃え広がったひどい火事で、日本橋あたりの大店もほとんどが焼けちまいました。その修繕に、ご府内はもちろん近在からも職人が出て朝からとんかんやってましたっけ。

そんなとき、政八って大工があたしんとこへ訪ねてきて、うちの娘を診てくれないかって言うんです。

年の頃なら十七か八の、面立ちの可愛い娘さんでした。

「どうしたね？」

訊ねてみたんですが、もじもじするばかりで何も語ろうとはしない。しまいにあこつちも辛抱が切れて、

「こちとら法印の弟子から学んだ歴とした薬師だぜ」

って大見得切ると、観念したのか頬を赤くしておずおずと話し始めました。

なんでも夜寝ているすきに陰門から蛇が入り込んで、そのまま居座ってるって言うんです。驚きましたね。そんな話は聞いたことがない。どうしようかと悩んだあげく、ある苦肉の策を思いつきました。

三宝に鶉の卵を乗せ、ゆもじを付けずにその上をまたがせるというものです。やってみると案の定、蛇のやつは匂いにつられて顔を覗かせました。そこを待ち構えていて、首根っこ掴んで一気に引きずり出したんです。

五寸くらいの黒蛇でした。首んとこに金色の輪があつて。

「娘の股ぐらに潜り込むたあ、太てえ野郎だ」

庭で打ち殺そうとしたんですが、立ち会っていた取上げ婆が、
「そりや道通さまちゅうて玉菊大明神の眷属だで、殺生すつと祟りがあつど」

なんて脅すもんでね。仕方なくそのまま放してやりましたよ。

子供たちのざわめき

盛岡の営業所で単身赴任したときの話。

社宅での独り暮らしにも慣れそろそろ妻の手料理が恋しくなり始めたころ、奇怪な体験をした。

夜中にふと目を覚ますと、窓の外を大勢の子供たちが通り過ぎてゆく気配がするのだ。それはまるで遠足へ向かう行列のように嬉々としてふざけ合い、終始楽しそうなざわめきに満ちていた。

こんな時間にどこへ行くのだろう、星の観察でもするのか？

不思議に思ったが、さして気にもとめないまま再び眠りについた。翌朝そのことを同僚に話すと、彼は声をひそめて言った。

「悪いことは言わない、他所へ越したほうがいい」

理由を聞いたが教えてはくれなかった。

その後もたびたび同じことがあり、さすがに気味悪くなった私はそこを引き払うことに決めた。

新しいアパートも決まり、その部屋で寝るのも今日が最後という夜――。

いつものようにざわめきが聞える。

ああ来たな、と思っていると、なぜだかその日に限って音はどんどん近づいてくる。

来る、来る、と息を殺して待っていると寝室のカーテンがひるがえり、ベッドのあちこちが足の踏む形にへこみ始めた。間違いない、子供たちは今私が寝ている上を通過しているのだ。

ぎゅつと目を閉じる。不意に耳元で声がした。

「一緒に行こ」

驚いて首を横に振る。ちつと舌打ちするのが聞こえ、今度はぎゅつと手首をつかまれた。予想に反して枯れ枝のような手だった。私は悲鳴をあげベッドから転がり出た。

ざわめきが止む。

見ると、部屋のなかには痩せさらばえた大勢の老人がいた。目の前に立つ老婆が、鼻からチューブをぶら下げたまま歯のない口で笑った。

「一緒に行こ」

慰問袋

「これやるよ」

戦友の葉山が、布製の犬のマスコットを投げてよこした。さつき配給された慰問袋の中に入っていたものだ。

「お守りにしろ」

「馬鹿、くれた人に悪いだろ」

「いいんだ、俺申年の生まれだから」

そう言って笑った。予科練のころから一緒だが、彼のこんなに楽しそうな顔を見るのは初めてだった。

「そっちには何が入ってる？」

そう訊かれたので自分の袋から中身を取り出した。石鹼、胃腸薬、腹巻き、それに飴玉が入っていた。同梱された手紙には、綾瀬国民学校初等科五年、平松フミエとあった。

「女の子からだ。兵隊サン、イツモアリガトウ、だとさ」

「良かったな」

二人、肩を叩き合って笑った。

翌朝、小隊長から集合がかかった。沖縄近海へ向けて出撃するという。特攻だった――。

「やつと俺たちの番か」

もとより生きて帰る気はなかったし、死んだ仲間の仇も討ちたかった。みんなまだ若かったのだ。

戦争とは無縁の青く澄んだ空の下、出撃する仲間たちと最期の盃をくみ交わす。真っ白いマフラーが風にたなびいていた。

突然、暖気運転中だった俺の機から黒煙が上がった。極度の物資不足で故障機をむりやり修理して乗っている。エンジンが保たなかったに違いない。

「ちくしょう、こんなときに」

結局俺は、次々離陸してゆく零戦を悔し涙を流しながら見送った……。

その後千歳基地へ転属となった俺は、そこで終戦をむかえた。復員して母親に例の犬のマスコットを見せると、なにを思ったのか彼女はその腹を裂き始めた。

「お前が生きて帰ってこれたのは、これのおかげだよ」
中に入っていたのは、折り畳まれた摩利支天の護符だった。

におい

ひとくちに靈感といっても色々ある。

霊そのものが見えるという人もいれば、なんとなく気配を感じる、あるいは姿は見えないけれど声が聞えるという人まで様々だ。

私の場合は、においだった。

近しい人が亡くなると、そのにおいを嗅ぎ取ることができるのだ。ピアノの先生が事故で亡くなったときには一日じゅう彼女の香水のにおいがしたし、学生食堂でカレーライスを食べながら「なんだか機械油のにおいがするね」などと言っていたら、町工場を経営する祖父が心臓発作で倒れたと報せがあった。徳島に住む従弟が火事で焼け死んだときには、あまりの悪臭にしばらくご飯が喉を通らなかった。

とにかく場にそぐわない不自然なにおいを嗅ぎ取ったら、それは虫の知らせに違いないのだ。

その日は、穏やかな小春日和だった。

授業中うとうとしていると、なにやら良いにおいが漂ってくる。ふんわりと甘い、お菓子のようなにおいだ。調理実習でケーキでも焼いているのかな？ それとも裏のパン屋から風に乗って運ばれてくるのだろうか？

なんだか得した気分になり、大きく息を吸い込んだ。

とたんに涙がこぼれてきた。

なぜだろう、無性に懐かしいような、優しいような、それでいて少し切ないような。

おそらくそれは、私のよく知るにおいに違いなかった……。

学校を終えて帰宅すると、家の中がバタバタしていた。見ると、母は目を真っ赤に泣き腫らしているし、父もどうやら会社を早退し

たらしかった。なにごとかと尋ねると、先年嫁いだ姉の生後まもない娘が亡くなったという。

育児疲れのため、乳をやりながらつい居眠りをし窒息死させてしまったのだった。

跨線橋の上で

二年前に死別した女と偶然再会した。

ようやく梅雨も明け、新緑の合間を心地よい風が吹き抜けてゆく初夏の夕暮れどきだった。

場所は日暮里の駅から谷中の墓地へと抜ける跨線橋の上で、彼女は水色の欄干にもたれかかり、なかば身を乗り出すようにしてぼんやり夕日をながめていた。眼下から吹き上げてくる生ぬるい風に、長い黒髪がたなびいていた。橙色のサマーニットが紅く燃える夕景に溶け込んで、その姿は半分透けているようにさえ見えた。

私は最初、声を掛けるのをためらった。
相手は死人なのだ。

周囲を見回してみたが他に人影はなかった。こちらに背を向けているせいで彼女の表情は窺えないが、おそらく私の存在には気づいていないだろう。無視して通り過ぎようか……。

この跨線橋は、かつて二人がデートの待ち合わせでよく使用した場所だった。彼女はいつもこうやって欄干にもたれかかり、私が来るのを待ちわびていた。そうだ、もしかすると……今でも自分の死に気づかず、私のことをひたすら待ち焦がれているのかもしれない。恐ろしいと思う反面、彼女のことかとともいじらしく感じられた。このままずっと待たせておくのも可哀想だ。

私は意を決し、おそろおそろ声を掛けてみた。

「やあ……」

彼女の肩がぴくつと震えた。

長い髪がざわりと逆立つ。

ゆっくりとこちらを振り向いたその目が、私の姿をみとめた瞬間、口が別な生き物のようにつねうねと蠢く。

やがてその口から空気が漏れ出し、それは徐々に甲高い悲鳴へと変わっていった。

そこで私はようやく思い出したのだ。

死んでいるのは自分のほうだ……。

ヤコブ

久しぶりに玄関先を掃除していたら、表札のすみになにか落書きしてあるのを発見した。マジックペンで書かれたその小さな文字は、こう読めた。

S W 8 ～ 1 8 R

どうも子どもの悪戯とは思えない。少し気味悪かったので、近所に住む姉に電話してみた。

「それは、訪問販売員が付けてゆく目印よ」

姉は結婚するまで保険のセールスをしていたので、そういうことに詳しくかった。

「Sは一人暮らし、Wは女性、Rは留守、数字は住人が不在にしている時間帯ね」

飛び上がるほど驚いた。まさかそんな個人情報で玄関わきの表札のすみに堂々と書かれていたなんて。空き巣狙いにでも見られたら大ごとだ。急いできれいに拭き消した。

ところがしばらくして仕事帰りに覗いてみると、また新たな文字が刻まれていた。

3 0 D W K K K M

姉によると、訪問を三回も断った三十路の独身女でしかも結構ムカつくやつだった、という意味らしい。頭に来た。私はまだ二十六だ。それに勝手にやって来てムカつくとはなにごとか。

「警察に相談してみる」

「そんなことしたってムダよ。それより訪問販売が二度と来なくな

る秘密のおまじない教えてあげるわ」

恐らくは冗談に違いないと思ったが、藁にもすがる思いで聞いてみた。それは目印の代わりに聖人の名を記しておくというものだった。

ヤコブ

ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」にも登場するキリストの十二使徒の名である。ところが神の奇跡だろうか、それ以来訪問販売がぴたりと来なくなつた。不思議に思つて訊ねると、姉は笑いながら種を明かしてくれた。

ヤ……やくざ

コ……怖いひと

ブ……金融機関のブラックリストに載っている

カウンターのすみ……

アーケード横町の西のはずれにある一杯飲み屋。カウンター席があるだけのこじんまりとした店だ。寂れるいつぱうの歓楽街にありながら、この店の排煙窓からはいつも真っ白い湯気が吐き出されていた。

切り盛りするのはもう四十路に手がとどきそうなママ。なんでも心臓発作で倒れた元のオーナーから居抜きで買い取ったらしく、家庭的な料理の味とママの愛想の良さで店はそこそこ繁盛していた。ところがこの店にはひとつだけおかしい所があった。

どんなに混んでいてもカウンターの一番すみが、なぜか空席になっているのだ。しかも無人のテーブルには決まって爛をつけた銚子と突き出しが置かれている。ママはときどきその誰もいない席のほうを見やり、艶っぱい視線で笑いかけていた……。

あるとき酔った客がママにしつこくからみ始めた。あれを買ってやるだのどこへ連れて行ってやるだのと口説き、あげくにテーブルへ身を乗り出してママの手を握ろうとした。

突然、カウンターのすみに置かれていたコップが音を立ててひっくり返った。たちまち酒がこぼれ、テーブルの上を濡らしてゆく。するとママはカウンターのすみに向かって、

「あら大人げない、酔ったお客さんの戯れ言じゃないの」

と言って婉然と微笑んだ。酔客はぎよっとなり、そそくさと勘定を払って逃げ出した。

数年後、店は再びオーナーを変えた。あのママは……やはり心臓発作で亡くなっただけだ。今は別の女性がワインバーをやっている。噂ではカウンターのすみはいつも空席で、そこにはまるで常連のお客でもいるようにワインのグラスがひとつ、ぽつんと置かれている。

という。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1742k/>

なめこ太郎 / 666文字奇譚

2011年7月26日03時19分発行